

## 〈教育ノート〉

# 臨床心理学実習におけるチーム援助実習の試み

瀬戸 美奈子\*

## A practice report of the student support team training

Minako Seto

### I はじめに

本学臨床心理学科の臨床心理学実習はⅠからⅣまであり、コミュニケーションスキルを学ぶことに始まり、各種心理療法の理論と技法について体験的に学ぶことを目的としている（谷向，2010）。履修年度は3年生から4年生で、臨床心理学実習Ⅱは3年生秋学期開講の必修科目である。シラバスに記載されている本科目の主題と目的は以下の通りである。

「各臨床領域にみられる心理的問題や課題に対して、それをどのように理解し、援助していくのかを体験的に学習する：臨床心理学実習Ⅰで学び身につけた基礎的な知識と技法を基盤にしながら、医療・福祉・産業・教育の4つの実際の臨床現場における支援のあり方を体験的に学ぶことを目的とする。」

教育臨床の現場における支援を学ぶ実習とは具体的にどのようなものであろうか。田島（2008）は臨床心理士養成指定大学院の院生への調査から、演習や実習の体験は将来臨床現場において実践活動を行う上で有効であることを報告しており、体験的に学ぶための実習や訓練として、面接や査定のロールプレイ実習が活用されてきた（喜田・内沢，2006）。ロールプレイ実習は役割演技ゆえに話される体験が生体験そのものではないという限界の問題があるが

（田畑，1982）、①失敗が許される、②やり直しが許される、③場面や目的に応じた状況設定で諸技法や諸対応のリハーサルができるという利点を有しており（清水，2004）、ロールプレイ実習に一定の成果が認められているといえよう。

大学院を中心に実施されるロールプレイ実習はカウンセラー役とクライアント役を学生同士が担う形をとり、試行カウセリングを行う場合が多く（鶴養・藤崎・島谷・渡邊・山崎・松永・田中・木村，2010）、実践報告も散見される（例えば江田・日高，2006；阿部・熊河・柳田・日高，2008）。しかし、学校臨床において、学校臨床心理士がクライアント（児童生徒）に対してカウセリングを行うことは業務の一部にすぎず（村山，2002）、中島（2006）は心理臨床における学校という場の独自性を指摘している。教育臨床における援助のあり方として、石隈（1999）は学校心理学の立場から、カウセリングに加えて、コンサルテーションやコーディネーションを含む教師・保護者・スクールカウンセラーといった複数の援助者によるチーム援助の有効性を指摘している。スクールカウンセラーと教師の連携を基盤にしながら（村山，2002）学校というコミュニティの有する豊かな援助資源を活用するチームワークを生かし、児童生徒の発達や成長に関わっていくことが学校

\*関西福祉科学大学 社会福祉学部 講師

における心理臨床といえる（鶴養・鶴養，1997）。教育臨床に関する実習授業を行う場合には、こうした教育臨床の特徴をふまえて展開していくことが求められる。

教師とスクールカウンセラーの連携、教師同士の連携を目的にした実習については、堺市教育センターが教員対象に「チーム援助トレーニング研修」を実施している（梅川，2011）が、臨床心理学実習の授業で学生を対象にチーム援助実習をとりあげた実践報告はまだ見られない。そこで、本研究では学生が教師、スクールカウンセラーといった役割をとりながら事例検討を行うというロールプレイ形式によるチーム援助実習について報告し、その有効性について検討することを目的とする。

## II 授業の概要

### 1 臨床心理学実習Ⅱの概要

2010 年度の臨床心理学実習Ⅱの履修学生は 131 人であり、2 クラスに分けて実習を行った。2 人の教員がオムニバス形式で授業を行い、筆者は教育臨床領域に関する実習 5 コマを担当した。教育臨床領域での実習スケジュールは表 1 の通りである。チーム援助実習は①ロールプレイを用いた校内の教師・スクールカウンセラーによるチーム援助会議（事例検討会）、②ロールプレイを用いた保護者・教師・スクールカウンセラーによるチーム援助会議をそれぞれ 1 コマずつ実施している。ここでは教師・スクールカウンセラーによるチーム援助実習に焦点をあてて報告する。

表 1 臨床心理学実習Ⅱ 教育臨床領域スケジュール

12 月 13 日	スクールカウンセリング実習① スクールカウンセラーとしての活動計画作りと相談室作り
12 月 20 日	スクールカウンセリング実習② スクールカウンセラーとしての生徒向け通信作成
1 月 17 日	チーム援助会議（事例検討）①（教師、スクールカウンセラー）
1 月 24 日	チーム援助会議（事例検討）②（教師、保護者、スクールカウンセラー）
1 月 26 日	まとめとレポート

表 2 児童の情報（全員に配布）

1	児童氏名	1 年 1 組	A 君（小学生）
2	家族構成	父親	A 君が 2 歳のときに離別 母親（31 歳） 会社事務
3	これまでの経過や最近の様子		
	4 月からの欠席日数	0 日	
	4 月からの遅刻・早退	0 日	
	〈事例の概要〉		
	4 月当初から授業中に落ち着きがない。5 月の連休明けからだんだんひどくなって、授業が始まると関係ない話をして騒いだり、席をたったりするようになってきた。「落ち着きなさい、すわりなさい」と注意すると大声をあげて、手足をバタバタさせて物を投げたり、暴れたりする。担任が注意すればするほど、ますます反抗的になっている感じがある。		
	〈これまでの対応〉		
	本人を放課後残して、「なぜ授業中に騒ぐのか」と聞いたところ、「授業がつまらない」という。「何がつまらないのか」と聞くと、黙っている。「つまらないからと言って騒ぐのはよくない」「他の子にも迷惑がかかるから、落ち着いて勉強しよう」と繰り返し話して聞かせてきた。6 月には生徒指導の先生にもお願いして、指導してもらった。		
4	家庭での様子や考え方		
	学校で騒ぎを起こしたときにはその度に母親に電話で連絡をしている。5 月末には一度母親に学校に来てもらって話をした。母親が言うには「保育園では特に問題がなかった」とのこと。家で母親が注意をすると「ごめんない」と素直にあやまって、「頑張って勉強する」と約束する。家でも繰り返し注意しているが、親としてもどうしていいかわからないと言う。		

## 2 チーム援助実習の内容

学生を4～6名のグループに分け、グループでロールプレイによる事例検討を行った。

まず学生全員に対して事例の概要(表2)を説明した後、グループごとにスクールカウンセラー、担任、養護教諭、生徒指導担当教員、専科の教員、対象児の隣のクラスの担任の役割を

決めた。どのグループにも必ずスクールカウンセラー、担任、養護教諭、生徒指導担当役は配置しているが、それ以外の役割についてはグループ人数に応じて調整した。

次に役割別に事例に関して異なった情報を与え(表3)、お互いの情報を共有しながらアセスメントを行い、援助方針を立てるように指示

表3 役割別の事例の情報

### 担任(1年1組)(30代前半)

・体育の時間は元気がいい。運動会ではリレーに出て頑張った。給食当番や掃除など係の仕事はきちんとやる。いろんな教科の時間に騒いでいるが、国語の時間が一番騒いでいる。最近ではひどくなって毎時間のように騒いでいるのではないかと。でも本読みをさせたらはきはきと読み、算数の計算問題は手をあげて答えることもある。能力は低くないと思う。4月から国語はノートを週に1回提出させているが、提出したことがない。漢字のドリルをやらせているが、それも一度も提出しない。ドリルを提出した子にはシールを貼っているのだが、この子だけまだ一枚もシールがない。A君が全く提出しないのを見て、最近他の子どもたちの中に「別にドリルやらなくてもいい。A君だってやってないのに、なんで自分がやらなきゃいけないの」と怠ける子どもが何人か出てきている。自分から積極的に人に話しかけるし、友だちも多い。これまで特に友達関係のトラブルはなかった。

・母親は家庭で注意していると言うが、きちんと本人に話しているのかわからない。「保育園では問題なかった」という言葉から、学校が悪いと思っているのではないかと。母親は神経質な感じで、学校に呼び出されたことに不満げだった。残業もあり、仕事が忙しくてかまっている暇がないのだろうか。愛情不足かもしれない。それとも家であまやかしているために、わがままになっているのだろうかとも思う。もしかしたらADHDなのかもしれないと思うが、自分にはよくわからない。母親が甘やかしている分、学校ではきちんとしたいと思って今まで根気強く指導してきたつもりだが、最近行き詰まっている。

### 養護教諭(20代後半)

・自分の体の具合が悪くて保健室に来ることはない。仲のいい子がケガしたり、具合が悪いと必ず心配して様子を見にくる。友だち関係は悪くない。友達にテレビのギャグの真似をしてみせて、ウケると得意になっている。A君がしていることが悪いことでもいいことでも、友だちが「へー、A君ってすごいな」「A君面白い」と思ってウケてくれると気分がいいようだ。宿題のことについて、一度友だちから「お前、宿題全然やってないだろう」と指摘された時に、A君が「いいんだよ、あんなの。気にしてないから」と答えたことがあった。その時に友だちが「A君は、先生に怒られても平気なんだ。へー。」と言ったのを、「ウケた」と勘違いしているように思う。生徒指導の先生に注意されたあと、保健室に来て「お母さんにこのことがバレたらどうしよう」と心配していた。「お母さんが怖い?」と聞くと「僕が怒られたことを知るとお母さんががっかりする」と答えた。お母さんに心配かけたくない、と思っているのだろうか。担任の先生はかなり細かいことを注意しすぎるので、A君とはあわないのかなと思っている。もう少しおおらかにA君に接してみたほうがいいのではないだろうか。

### 生徒指導担当(40代前半)

・6月に一度担任から頼まれて指導する。どうしてそんなことをしたのか、と聞くと「イライラするから」とだけ答えて、それ以上は話をしない。「授業中に騒ぎ出すのは他の子にも迷惑だよ」と伝えると、「はい」と返事はするが、深く反省している感じはない。好きなサッカーチームの話などには、楽しそうに応じる。担任の先生も息詰まっているので、なんとか担任の先生をサポートしてあげたいと思う。

### 音楽専科担当(30代)

・音楽の授業では特に騒ぐ様子は見られない。声も大きくて、歌も一生懸命歌っている。たまに友達と悪ふざけをするときもあるが、そのときはチラチラと私のほうをみている。注意をすればすぐにやめる。わざとやっているのかなとも思う。合唱の感想を書いて提出するときには、なかなか提出できずに、みんなより遅れてやっと提出した。しかも感想は「楽しかった」と1行しか書いていなかった。

### 1年2組の先生(30代)

・屈託なくいろんな先生に話しかけてくる子。夏休みはお母さんがキャンプに連れて行ってくれると楽しそうに話していた。2組の子と一緒に学童保育に知っているが、そこでは楽しくドッジボールをしたりして遊んでいるらしい。昆虫の図鑑を見るのが好きで、虫にはすごく詳しいとクラスの子が話していた。運動会のお母さんがビデオを持って見に来ていた。リレーで走った後、お母さんに手を振っていた。運動会のお母さん、自分から後片付けを手伝ってくれた。「ありがとう。A君はよく気がつくね」と言うと、「家でもお母さんの手伝いをするから、こんなの当たり前だよ」と得意そうだった。

した。学生は役割によって異なった情報を持っていることは知らされているが、その情報の内容についてはお互いに知らないまま話し合いに臨んでいる。

なお、事例検討会の司会はスクールカウンセラー役が担当することとした。事例検討の結果についてはグループごとにまとめ、授業の最後に各個人で実習振り返りシートを記入した。振り返りシートの内容は①グループの雰囲気について、「まったく活気がなかった」から「かなり活気があった」まで5段階で評定させ、その理由についても記述させた、②自分の意見について「まったく主張できなかつた」から「十分に主張できた」まで5段階で評定させ、その理由についても記述させた、③事例についての共通理解を得るために大切だと思うこと（自由記述）、④実習を通しての気づきや感想（自由記述）で構成されている。

### Ⅲ 実習の振り返り

#### 1 グループの雰囲気について

事例検討を行っている時のグループの雰囲気については、80%以上の学生が「やや活気がある」「かなり活気がある」と答えた(表4)。「活気がある」と答えた学生はその理由として、「様々な観点から事例に関する問題や対応の方法などが絶えず出たために活気があった」「グループのメンバー同士それぞれの役割をちゃんと演じられて、意見や感想を聞いて非常に刺激的だった」「本格的で落ち着いたある会議だった」などをあげている。役割ごとに持っている

情報が異なっているために、違った観点からの意見をお互いに交流することで議論が深まり、話し合いの活性化に結びついたと考えられる。その一方で「あまり活気がない」「どちらともいえない」と回答した学生は、その理由として「無言の時間が長く、何か情報を得ても、あまり発展せず、一つ聞いて終わり、また違うことを聞いて終わりという感じだった。」「一体どういう目的で話し合っているのかという軸が定まっておらず、話がまとまらなかった」をあげている。こうした回答からは、グループ内で事例に関する情報を共有した後、そこから援助方針をたてていくまでの段階での話し合いに難しさがあることが推察される。

#### 2 意見の主張について

事例検討の中で、十分に自分の意見を主張できたかについては、60%弱の学生が「ややできた」「十分できた」と回答し、14%の学生が「全くできなかった」「あまりできなかった」と回答した(表5)。意見を主張できたと回答した学生はその理由として、「グループが協力的だった」「司会役の人が上手に話を聞いてくれた」といったグループの雰囲気や司会の役割をあげている。意見が主張できなかつたと回答した学生は「どこで自分の意見を言っていかわからなかつた」「司会をすることでいっぱい意見まで言えなかつた」といった意見を切り出すタイミングの難しさや、話し合いの司会という役割の難しさをあげている。

表4 グループの雰囲気 (N=107)

	まったく活気がない	あまり活気がない	どちらともいえない	やや活気がある	かなり活気がある
人数(%)	0 (0)	6 (5.6)	24 (22.4)	36 (33.6)	41 (38.3)

表5 話し合いで自分の意見を主張できたか (N=107)

	まったくできなかつた	あまりできなかつた	どちらともいえない	ややできた	十分できた
人数(%)	2 (1.9)	13 (12.1)	28 (26.2)	30 (28.0)	34 (31.8)

### 3 グループの共通理解を得るために役立ったこと

グループの共通理解を得るために役立ったこととしては「司会の役割」と「話し合う態度」をあげる学生が多かった。「司会の役割」として「司会が同じ質問をそれぞれの役割にすることによって、みんなが違う情報を出し合えた」「司会が具体的に聞き出してくれた」「司会がみんなの意見を聞いてまとめてくれた」などがあげられており、事例検討会の司会が「情報を引き出すための質問」「意見のまとめ」を意識的に行うことが、援助チーム内での共通理解につながることを示唆された。「話し合う態度」としては「しっかりと意見を言う」「自分から積極的に意見を言う」「一人よがりの意見を言わない」「みんながわかるように説明する」「相手の意見を否定しない」「子どものいいところに目を向ける」といった回答があげられた。話し合いの中では「聞く」という行為だけでなく、相手に伝わるように意見を伝えることが重要であると感じた学生が多かった。

### 4 実習を通して感じたことや気づき

ロールプレイによる事例検討の実習を通して学生が感じたことや気づいたことは、大きく「役割に対する気づき」「チーム援助の有効性」「話し合いの配慮・難しさ」「ロールプレイの難しさ」といった内容に分けられた(表6)。

「役割に対する気づき」として、スクールカウンセラー、担任教師、養護教諭といった役割を自分自身が演じることによって、それぞれの役割が持つ学校内での立場、事例検討会での立場に気づいたといった感想があげられる。スクールカウンセラー役の学生は話し合いの司会を行うという体験を通して、話し合いをまとめる調整役やアセスメントを行う際の中心となる役割をスクールカウンセラーが求められていることを理解し、個別のカウンセリングを行うだけではないスクールカウンセラーの役割に気づくことができた。

担任役をとった学生からは、子どもの援助の中心が担任であるというプレッシャーや、援助が功を奏さない時には担任として自分の力量を責められていると感じるといった感想があげられた。養護教諭役をとった学生からは、担任との関係の難しさやどこまで保健室の情報や養護教諭としての考えを伝えるかという葛藤を経験したという感想があげられた。

「チーム援助の有効性」については、様々な情報をもとに事例の理解が深まったことをあげる学生が多かった。またロールプレイではあっても、複数の援助者が関わることで精神的にサポートされている感情を味わう経験をあげた学生もみられた。チーム援助の有効性については瀬戸(2008)が①協力関係、②多面的な理解、③援助方針の共有、④多様な援助の4つの観点から整理しているが、今回のロールプレイによるチーム援助実習では、①協力関係、②多面的な理解に関する有効性を体験したといえる。話し合いの時間の大部分が事例に関する情報交換を行い、アセスメントを行うことに割かれていたことや、学生によるロールプレイでは、学校で実行できる援助方法についての知識が乏しく、援助案に具体性が欠ける傾向にあるために、実習では③援助方針の共有や④多様な援助について体験することが難しかったと考えられる。

「話し合いの配慮・難しさ」については、担任が責められている時のサポート、担任を傷つけない意見の言い方など、担任への配慮をあげる学生が多かった。また、教師やスクールカウンセラーだけでは限界があることから、保護者を交えた話し合いの必要性を指摘する感想もみられた。そのほか、話し合いの場での意見調整の難しさを感じた感想もあげられた。

「ロールプレイの難しさ」については、役割設定されることによって、どのような役割が要求されているかを理解することが難しく、役割演技を通しての自己の気づきまでいたらなかった学生がいたことがわかった。こうした学生に

表 6 実習を通して感じたことや気づき

<p>〈役割に対する気づき〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カウンセラーは本人から相談を受ける仕事とばかり思っていたけれど、直接本人に関わらなくても、こういう風に大切なまとめる役割でもあるのだとわかりました。</li> <li>・カウンセラーはみんなに誰を責めることなく話をしないといけないし、大変だと思った。</li> <li>・担任の役をして、担任が一人で抱え込まないことが担任にも A 君にも大切なことだと感じた。</li> <li>・担任が一番中心となって意見を言われるし、求められる。とてもプレッシャーに感じる。</li> <li>・担任の先生は情報がありすぎて、何から話していいかわからなかった。さらにこんなに情報があるのに他の先生から聞いた話が知らなかったこととかあったから混乱した。情報がありすぎるのも大変だと思った。</li> <li>・今回養護教諭の担当をして、担任の先生との話をもっと取り入れるべきであったんじゃないかなと思った。客観的に考えることのできるポジションだなと思った。</li> <li>・養護教諭の役をしたが、担任の先生は大勢のクラスメイトの中の一人である A 君をみていて、養護教諭は時々 A 君一人を見ていたので、それぞれの良いところがあると思いました。</li> <li>・養護教諭役で担任の先生へ意見を言うか言わないか本当に悩みましたが、言いませんでした。</li> <li>・担任以外の先生が意見を言うのは難しいところがあった。</li> </ul> <p>〈チーム援助の効果〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どの先生もいろんな A 君を見て、報告してくれていて、一人で考えてるのではないんだと思ったら、心強くなった</li> <li>・担任は情報がすごく多いけれど、ほかの人からは違う A 君がみれて話し合いが大事だ。</li> <li>・A 君のアセスメントなどの理解を深めるには、いろんな角度から見るのが大事だと感じた。また一人で考えるより先生の間で助けあうことで解決できることもあると感じた。</li> </ul> <p>〈話し合いでの配慮・難しさ〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉や情報の伝え方に気をつけないといけないと思った。「私の前ではいい子です」など言い過ぎると、他の先生は「自分が悪い?」と考えてしまうなと思った。</li> <li>・話し合いをするうえで、「何を話し合うのか」という軸がぶれないようにできればよい。</li> <li>・担任の先生が責められている時に、クッション材やサポートが必要。</li> <li>・問題の原因が家庭にある場合、なかなか学校関係者の会議だけでは無理があるように感じた。</li> <li>・ポジションごとに考えがかわってしまう。各自が持っている情報に固執しないことが重要。</li> <li>・それぞれの持っている情報が違うことが難しい。情報をどれだけわかりやすく、知らない人に伝えるかとても迷った。</li> <li>・ほめて伸ばすことの大切さをグループで話し合い、できなかったことばかりに焦点をあてすぎないように、注意が必要だと思いました。それぞれの立場で話し合いをすることは、配慮を持ちながら話し合いを進めたほうがよいことを知りました。</li> <li>・話の流れがバラバラだったように感じたので、部分部分で話をまとめるべきではないか。</li> <li>・全員の立場を立てると意見がまとまりにくいと思った。</li> <li>・いろいろな意見が出た時、頑固に数人が自分の意見が正しいと言い張るようなことがあればどうすればいいのか気になりました。</li> </ul> <p>〈ロールプレイの難しさ〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・その役を考え理解してから情報を伝えるという難しさと、学校内での立場等の環境設定が行われている分、発言のしにくかったように思えました。</li> </ul>
--

については今後の配慮が必要であろう。

#### IV まとめ

教員志望の学生に比べて心理を専攻する学生は、個人志向性が高く、優秀なスクールカウンセラーを養成するには、早い時期からチームでの活動を日常的におこなっていく必要があることが指摘されている (諸富, 2009)。

今回実施したロールプレイを用いたチーム援助実習を通して、学生はチーム援助の意義と同時に、チームで活動する難しさや具体的な配慮

点に気づくことができた。また教師や養護教諭といった役割が学校の中でどのような立場にいるかを理解することによって、学校文化に対する理解を深めることができたといえる。こうした学校文化の理解とアセスメントは、スクールカウンセラーとして学校に参入する際に重要であり (村山, 1999)、教育臨床において不可欠な視点をこの実習を通して感じることができたといえよう。

今回の実習にあたってはいくつかの課題も残されている。一つはグループ活動が苦手な学生

への配慮である。学生の中にはグループでの話し合いを不得手とするものが見られ、そうした学生にとっては話し合い活動そのものが大きな負荷となったことが想定される。話し合いが苦手な学生に対して役割を選ぶ際の配慮や、グループでの進行が滞った場合に教員がどういった場面で介入するかについて、今後検討していくことが必要である。

また学生にとって異なった役割をとってのグループでのロールプレイは初めての経験であり、役割演技を行うことに対する難しさを感じた学生も見られた。実習の効果を高めるために、教育臨床領域でチーム援助実習を行う前に、クライアント役・カウンセラー役による試行カウンセリングの実施を経験するなど、実習全体を通してのプログラムの見直しや整備も検討していくことがのぞまれる。

#### 引用文献

- 安部希・熊河美晴・柳田亜矢子・日高三喜夫  
2008 カウンセラー訓練における試行カウンセリングの試み(第10報)－自己肯定意識尺度・STAIに基づく検討 久留米大学院心理学研究科心理教育相談室紀要, 9, 11-16.
- 江田早紀・日高三喜夫 2006 カウンセラー訓練における試行カウンセリングの試み(第6報)－質問紙によるカウンセリング効果に関する検討 久留米大学院心理学研究科心理教育相談室紀要, 6, 3-9.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 喜田裕子・内沢沙紀子 2006 心理臨床におけるロールプレイ実習の基礎的研究－初学者は、どのように息詰まるのか－ 富山大学人文学部紀

- 要(45), 13-29.
- 諸富祥彦 2009 教師集団とのチームで取り組むスクールカウンセリング 子どもの心と学校臨床, No1 遠見書房 Pp.78-86.
- 村山正治 1999 学校における心理臨床活動の準備 河合隼雄・山中康裕・小川捷之総監修 学校の心理臨床 金子書房 Pp.11-18.
- 村山正治 2002 学校臨床心理業務の社会的意義 村山正治・鶴養美昭編 実践!スクールカウンセリング 金剛出版 Pp.23-35
- 中島義実 2006 スクールカウンセラーとしての導入期実践 風間書房
- 瀬戸美奈子 2008 コーディネーション行動がチーム援助の有用性に与える影響－中学校における事例を通して－ 教育相談研究, 45・46, 25-33.
- 清水幹夫 2004 クライアント役を設定してのロールプレイ面接 楡木満生・松原達哉編 臨床心理基礎実習 培風館 Pp.80-97.
- 田畑治 1982 カウンセリング実習入門 新曜社
- 谷向みつえ 2010 子育て広場における臨床心理学実習の実践報告－大学生の親性教育の試みについて－ 総合福祉科学研究, 創刊号, 243-248.
- 田島佐登史 2008 臨床心理士養成指定大学院の院生が考える終了後に役立つ学習と体験 目白大学心理学研究, 4, 35-48.
- 鶴養啓子・藤崎春代・島谷まき子・渡邊佳明・山崎洋史・松永しのぶ・田中奈緒子・木村あやの  
2010 試行カウンセリング実習の可能性と考慮点の実証的検討①－体験についての予備調査－ 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 12, 1-12.
- 鶴養美昭・鶴養啓子 1997 学校と臨床心理士－心育ての教育をささえる ミネルヴァ書房
- 梅川康治 2011 教師のためのチーム援助研修－堺市の実践「リソース発見研修」学校におけるチーム援助の進め方 児童心理, No 927 金子書房 Pp.130-135.